

# せたかむい200号記念特集



発行：古平町史編纂室  
 文化会館 842-2590  
 第200号 平成18.5.1

せたかむいが創刊200号を迎えましたので、特集号を発行することにしました。到達点というものはありませんから、今後も坦々と進むことになろうかと思えます。ご支援のほどをお願い申し上げます。第一号の発行に当り『発刊に期待して』という、当時の畑澤町長の一文がありますので、当時を回顧して再掲いたします。

「言い海、緑の山、祖先が血と汗で築いた我が郷土の歴史は、少なくとも三三〇年の昔に逆上らなければなりません。その様相は複雑多岐にわたり、真髓を探究するためには、広い分野にわたっての資料を必要とするものです。」

本町の歴史に対する意識の高まりを求めて、今回「せたかむい」を発刊することになりました。

町史第三巻の発刊に当って先人の苦勞を偲び、建設と発展への勇気を奮い起こし、明日への跳躍台にしなければなりません。新しい歴史を積み重ねこれを後世に譲りたいと思えます。町民皆様からの貴重な資料の提供をお願いします。発刊に当たつてのご挨拶いたします。」

## 200号 目次

200号記念・目次	1
☆年表で読む古平の歴史 牧畜業 ③	2
☆高野名幸作日記・大正二三年(続き)	3
☆父の日記に寄せて 高野名正治	8
☆『せたかむい』で古平町を再発見 高橋藤藏	8
☆古平の民話 あきあじ地蔵(禅源寺)	9
そば喰い地蔵(願雄寺)	10
☆澤江村「狐の鳴き占い」の話	11
☆海的美談・第二出羽丸遭難	12
☆町内小学校の沿革一覽と町内の各小学校	14
☆開町一三八年・古平町	16
女子挺身隊として	18
戦禍の中をくぐり抜けて	19
子どものしつけ	19
はすし娘	20
わが学び舎	21
おとし石・おなご石	22
☆心に残る古平小のバザー	23
【写真】古平尋常高等小学校生徒が廻り刈橋へ遠足	24
☆第三のふるさと	25
☆札幌通信・喜びも悲しみも超えて	26
☆明治末・古平に嫁いで「友人への便り」 梅野モシ	27
☆あゝ樺太国境守備隊 橘 義春・遺稿	28
☆岳轉和尚「五百羅漢見聞録」	29
☆〈短歌〉古平町岬短歌会・〈俳句〉古平俳句会	30
☆短歌・春のことぶれ 瀧内優子	31
古平町史年表・昭和20年(続き) 21年	32
編集を終えて	31

# 年表で読む

## 古平の歴史

《105》

### 畜産業

#### 牧畜業 ③

町内で草競馬や産駒品評会などが行なわれていた大正一〇年代には、町内でも一部の人間の間で乗馬熱が盛んになり、自分で乗馬用の鞍を準備して、鞍馬や農耕馬などに乗っていたというが詳しいことはわからない。

入船町①山口家には、当時のものとして鞍や乗馬用の帽子、むちなどが保存されている。

古平の馬は鯨漁が盛んになるにつれて、海産物や漁業資材の運搬、それに鉱石運搬に多く必要としたことから飼育頭数が増加したが、農耕馬は少なかった。

軍馬としての重要性が増してくると、規則によって軍による厳正な検査も行なわれるよ

うになり、大正八年に第一回検査が、浜町種田海産干場(通称本陣の干場)で行なわれた。検査を受けたのは牡馬二頭、牝馬一二頭、合計一四三頭で、結果は「概して良好」という講評であった。

#### ◇乳牛の飼育

明治三八年、浜町(現在の西大通中央付近)の山口市三郎が古平町で初めて乳牛を飼育した。家の前に牛に飲ますために井戸を掘ったが、その水が大変良質であるというのが評判になり、その井戸を「牛屋の井戸」と言って付近の人達が貰い水をしていた。

(中野雅栄・談話)

明治四四年、港町の竹内厚が成功会をつくって、チョペタンの沢の奥に牛舎を建てホルスタイン種の乳牛六頭、子

牛二頭を飼育した。毎朝、牛乳カンを下げて各戸を回り量り売りをしたていたが、需要は病人や乳幼児などの外は、常用する人は限られた一部の人であった。

また、飼育についての知識や経験もほとんどなかった。← チョペタンの沢奥での乳牛の飼育風景(場所は不明)



とから管理も十分でなく、乳牛の病気で倒れるものも出てきて経営にもいきづまり、長くは続かなかった。

明治二〇年頃、広島県地方から美国町川上地区に移住して来て酪農業を始めた海田牧場(合資会社)が、大正の始め頃と思われるが、新地町の通称・大三(ダイサンII屋号)の高台に牛舎を新築し、牛乳を量り売りで配達を始め、昭和の始め頃まで営業を続けていた。

同じ新地町の田沢新聞店では牛乳販売所の看板を掲げて、昭和一〇年頃まで瓶詰めにしたものを販売していた。

美国町の海田牧場では戦前、牛肉や豚肉をうす皮に包んで古平町にも売りに来ていたが、町内の商店では肉類を保管する設備もなく、また需要も少なかったので販売しているところはない。

その後、古平町では乳牛の飼育は全く行なわれず、昭和四四年、島根県から肉牛を導入して飼育が始まった。

大正一三年 続

▼十一月二五日

ずいぶん寒くなった。原田さんと火防組合の会費を集めるべく八時から出かけた、山側三〇余軒、正午頃までに完結しこれで安心だ。カレ網支度で綿ロープ類がポツポツ売れていく。雪は二三寸積もったので子供等はソリ引きなどで喜んでゐる。無尽講あちこちでこわれたとて大騒ぎだ。

▼十一月二六日

起床七時、寒さは寒中の如し。熊さんは冬囲いなどやる。いよいよ冬来たりだ。原田さんと集金した火防組合の会費三二戸分一〇九円を組長に納める、これです責任を果たして安心した。

▼十一月二七日

起床七時、寒さは日増しに加わりすつかり冬景色だ。根雪かも知れぬ、町は馬ソリがチリンチリンと出ている。リンゴ本年は一般に品不足か、あちこちから買人がたたくさん来る。一〇〇匁五錢でドンドン売れる。リンゴも五、六年前は全盛時代であったが、近年は不作続きで意気消沈、が

んばつてゐるのは四、五軒だ。これを辛抱すればきっと割りに合う有利な作物になるだろう。今は辛抱が肝心だ。小樽行きリンゴ、今日、勇丸に積み込んだ。利尻行きも送る。

▼十一月二九日

起床八時、町は雪が大分消えて道路が悪い。月末だが景気サツパリ引き立たぬ。リンゴの客毎日あり相当小売する。四、五円

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

(111)

平均で売れる、一斤六錢に売れば相当な収入になる。

▼十一月三〇日

起床七時、この頃の暖気と雨で雪も消えて町はまた黒土になった。過日、大川さんの無尽騒ぎがあつたが、二、三日前またこわれたところがあり、庶民の唯一の金融機関としていた連中は大恐慌を来たし、このため市況も一時沈滞したとのことだ。この日は

四軒で五〇円ほど集金だったが、なかになか入らぬ。雨一日中降り暖かい日であった。

▼十二月一日

今日は祝聖会の例会日、五時半起床、早速出かける。昨夜来の雨は一時頃から粉雪となり寒さも厳しい。町中は真つ白になっている。私は二番目であった、他の連中もこの寒さで遅れたのが多かつた。読経後、和尚の部屋で

三〇分ほど話して帰る。この時化で港内には汽船が六隻も停泊している。一〇時頃から伊藤でセリがあるというので行く、たらい外三〇円ほど買う。不況といつてもかなりの受れ行きだったようだ。

▼十二月二日

起床八時、朝食後、畑の小野寺の三男、二一歳で亡くなり葬式送りに行く。三山神社の社務所誰も居なくなり、ほごしている。

無尽で大騒ぎしこんなことになつてしまつた。昼食後、伊藤のセリに行つたが三、四〇人が集つてゐる。夕方からナギになり、入港していた汽船六隻のうち二隻が出港した。

▼十二月三日

天気快晴、青空がみえて雪も消える。熊さんは、父と馬車屋と共に伊藤からセリで買った品物を運搬する。店はカレ網用品が売れている。大阪のおじさんに久しぶりで近況報告をした。支店の貞治さん、一年志願から戻られたとのこと、お祝いに行く。

▼十二月四日

今朝は朝から寒さが厳しく雪が降る。リンゴは毎日二、三円ずつ売れている。余市セ清水から出張員が来る。どこも不景気だとのこと。

▼十二月五日

起床七時、いよいよ冬景色となる。熊さんは裏で納屋をこしらへている。雪がチラチラ降り出す、年末となつたが不景気なことだ。

▼十二月六日

チラチラ雪が降る。年末で何となく心せわしい。札幌の一枝さ

人へ縁談の件につき手紙を出した。夜、<sup>㊤</sup>で部落会あり、いろいろ話し九時帰る。寒くなった。

▼二月七日

起床七時、いよいよ根雪になった、どこを見ても一面真っ白である。午後一時から火防組合の巡回に出る。終わつて本により話し四時帰る。昨日一時の船で支店の姉さん、千代さんが大阪へ出発された。夜六時、禅源寺へ寒修行的ことにつき協議に行く。一〇余名集りいろいろと協議し、九時帰る。

▼二月八日

朝からの雪ですっかり冬景色、妻は正の姉さんしばらく病気のところ全快したので、お祝いかたがた行く。父もこの頃調子が良いとて近所へ出かける。今日もリンゴ二、三円売れる。妻は小林さんのおつかさんが亡くなり通夜に行く。幸治は一五日から試験とのこと。二二、三日には帰るだろう。昨年の今頃は文治がけがをして、小樽の整骨病院へ行っていたのだ。当時を思い起こす。

▼二月九日

天気快晴、七時起床。余日な

くだんだん忙しくなってきた。土場の小林おつかさんの葬式で、西説教所まで送る。青空で珍しい良い天気だ。父は午後から新地方面へ出かけた。綿糸相場はずいぶん高い、三七〇円〜三八〇円だ。

▼二月一〇日

起床七時、今日は割合暖かい、雨が降りザブザブだったが、その後雪に変わる。正午頃、<sup>㊤</sup>が来る、いろいろ話し昼食を出し、二時頃帰る。余市<sup>㊤</sup>しょう油屋が来て販売方を申し込まれる。何商売でも勉強が第一。二時頃、<sup>㊤</sup>美国から網一七反、ロープ等二〇〇円ほど現金買いの客が来る、ヨイ客であった。

▼二月一一日

起床七時、今日は朝から青空、珍しく好天気だ、海も上ナギで夏のような、一二月になってこんな天気は珍しいことだ。本年は今のところ雪は少ない。傘さんから依頼されたリンゴの看板を書く。夜、曾我忠さんが来ている話す。父は金沢床屋のおつかさんの母が死亡したので通夜に行く。子供等三人は、台所から

茶の間まで走り回っている、学校の運動場のようだ。

▼二月一二日

起床七時、鼻カゼをひいて気分がすぐれぬ。朝のうちは快晴であったが午後から暴風雪となり、海は大時化になった。夜になり風ますます激しく、家はシミシなる。夜中の二、三時頃が一番激しかった。近來にない暴風雪と波であった。

▼二月一三日

昨夜来の大時化は近年稀なことだ。八時頃浜へ出て見る、浜中方面は割合被害は無いが、沢江まで行く。〇さんの近くでは矢来の破損しているところが多い。埼長では廊下一棟が波に流されたが、外にも廊下の被害がある。入船町方面でも被害があるとのこと、発動機船二隻が停泊していたが無事であった。一日中風雪が激しく、店の板戸を閉めたままだった。

▼二月一四日

起床七時、一昨日からの大時化も今朝は静かになった。実に近年にない大時化、大謀網一統が流失したとのこと、損害も多大

ならん。近年大謀は不況続きである。午後から雪が激しく降る。

▼二月一五日

今日は禅源寺祝聖会例会当日、二時頃から目が覚めて気が張っている。五時起床、まだ誰も起きぬ、真つ暗だ、顔を洗い五時一〇分出かける。星がこうこうと輝いている。門前まで行つたら六名がほとんど同時であった。今日は早かった。読経の後、例の通り和尚の部屋で一時間ほど話し八時交える。青空で太陽が輝き冬空には珍しいことだ。午後一時から信用組合で物産商組合員の営業税協調員の選挙をし、三時帰る。

▼二月一六日

起床七時、寒くなった。まだコタツはかけぬ。年末になったので帳簿調べをする。夜、本鶴間に行きいろいろ話し、一〇時帰る。

▼二月一七日

起床七時、朝から雪がチラチラ降り、寒い寒い日だ。湯内からタクコ繩用の綿糸を買いに来る。だんだん年末になったので心せわしくなった。夜、一二月分の目録書きをやる。

▼二月一八日

雪は降るが割合暖かい。リンゴ二、三円ずつ売れる。一〇〇匁六銭で高いとは言わぬ。六銭くらいで売れば、熱心によつても引き合うのだ。来る二五日、モチ搗きをやることにして、困の分も揃いてやることにした。

▼二月一九日

起床八時、朝から雪が降り少しも止まぬ。年末も近づき何となく忙しい。綿糸相場もますます高く、目下三八〇円余、近來になく高い。夜、信用組合竹内さんから、明夜の追分の文句を書いてくれと頼まれ、一七、八枚も書く。寒い寒い日、雪が一尺も積もる。

▼二月二〇日

朝から雪が降り寒い日だ。熊さん沖村まで掛取りに行く。一〇円ほど集金した。夜、信用組合で追分節大会があり行く、六時から始まり追分節、安木節、八木節、踊りなどがあり面白かった。一〇時帰る、父も行った。

▼二月二一日

起床七時、雪は降っているが風もなく、海は上ナギだ。幸治は昨日で試験が終わり今日帰る日

なので、一一時の船にユキちゃん、トミ、文治、父も迎えに行ったが来なかった、午後二時の富丸だろいと悦三も四郎も行く。帰って来て子供等は大喜びだ。本、食、パ、その他の土産物に大喜び、夜は近所の友達が出来て、双六(すぐろく)などして遊ぶ。雪は一日中降り続く。

▼二月二二日

起床七時半、雪が降り寒さも強く冬らしい。幸治が帰省しているので、近所の友達遊びに来て賑やかだ。二五日モチ搗きなので、今日、モチ米の準備をする。明日とぐつもりだ。

▼二月二三日

今日は米とぎ、半よしさんが手伝いに来る。年末だが町中も寂しい。寒いので今日からコタツをかけた。幸治はトミ、吉治らが学校へ行つての間は悦三、四郎らと遊んでいる、こうして家へ帰り、父母や弟妹と親しく遊ぶのが楽しみなのだ。母親のいない子供等は可哀相なものだ。

▼二月二四日

起床七時半、今日は近頃になく寒い。街を歩いている人の足音

がキニキニとなる。そろそろモチ搗きの時期になったので、蒸し器や臼・きねなどを運んでいる人の姿が見える。熊さん、午前中は入船町方面へ行く、不景気なせい

か集金も少ない。父は明日モチ搗きなので、薪やかまどの支度など一生懸命だ。気分が良いのかなかなか元氣だ。夜、傘兄さんが来て、明朝のモチ搗きが早いのでふかしなど支度する。支店の兄さん、今日大阪から帰られたとのこと。

▼二月二五日

今日モチ搗きをやるので、傘さんは昨日から泊まる。今日は未明からモチ搗きで、傘さん、熊さんらは二時頃から起きていろいろ支度にかかる。三時半頃から搗き始める、五時頃には古島さん、伊野さん、才太郎さんらが来て一生懸命だ。八時に鎌田さんも来る。困二俵、傘一斗、私のところは六斗搗くのだ。二か所所蒸かすのではかどる。子供等もペタンペタンやるので面白がつて大騒ぎ、大勢の人が来て賑やかなので喜んでゐる。お供えを作つて神棚に飾る。これで正月らし

くなつた。割合早く六時頃に終わった。

▼二月二六日

昨日はモチ搗きで皆疲れたのか、今朝は割りと起床も遅かった。今日はモチ切りなどやる。初雪の頃は、今年は雪不足かと思つていたが、この頃は毎日毎日降り随分積もる。積丹方面から、刺網五〇掛の値段の問い合わせがポツポツある。一一円五〇銭と通知する。カレ網は今のところ漁が無いとのことで、景気も引き立たぬ。小樽・鈴木豊作さんから、幸治の成績が九番になつたと通知してくれた。加瀬さんへ依頼した腕時計、八円だとして買って来てくれた。夜、鈴木さん、傘、中川さんへ手紙を書く。

▼二月二七日

起床八時、今日は近來珍しい晴天、そして静かな暖かい日である。海は上ナギ。カレ網は相当に漁はあつたが、近頃は値段が安いと漁夫連はコボしている。熊さんは午前中入船町方面、午後、港町、沢江方面へ目録配りをする。どこへ行つても不景気の話ばかりとのこと、一〇余円の入金

があった。火防組合の巡視があり二時から三時で終わる、三へ久しぶりで行く、話し中に困から電話があり、小樽手宮でダイナイトが大爆発し死傷者多数、手宮付近は屋根が飛ぶやら大混雑とのこと、岡崎の辺りでも戸や障子が外れるほどであったという。詳しいことは混雑のため不明とのこと、実に悲惨なことだ。明日は詳細がわかるだろう。八時帰る。小学校は今日から冬休み。

▼二月二八日

起床七時、天気快晴。亡き母の命日、想えば早四年の昔となった。亡き母は実にわれわれを慈しみ育ててくれた大恩人だ。生前中のことを思えば実にありがたいことばかりだ。永世忘れることのできない尊い母である。一〇時、和尚さんが来られて読経、しばらく話して帰られる。小樽の昨日の大惨事は実に気の毒なこと。まだ詳細はわからぬが、とにかく大被害とのことだ。夜、父は小野寺鉄之助さん家内の通夜に行く。

▼二月二九日

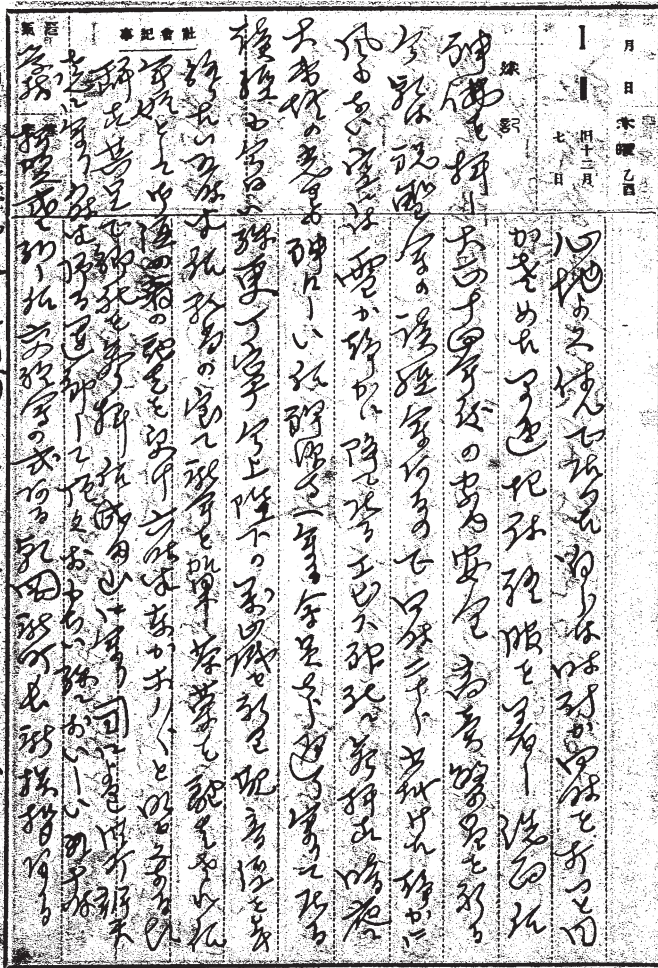
起床七時、店は掛けや何かで

相当に忙しい。去る二七日の小樽港内でのダイナイトの爆発は、近來にない大惨事だ。新聞を見ると死傷者三〇〇余名、損害は一〇〇万円にも上るとのことだ。岡崎、平などへ見舞状を出す。

▼二月三〇日

起床八時、雪が降り寒さが厳しい。新聞によれば二八日午後一〇時頃、札幌の(井)呉服店(デパート)から出火、三階の広大な建物も二時間余りで焼失、建物五〇万円、商品五〇万円、合計一〇〇万円の損害とのこと。年末を控え思いがけない大事件ばかりある。入船町方面はカレ網が相当にあつたが、値段が安い

← 高野名幸作さんの日記・大正十四年一月一日(原寸大)



ので引き立たぬ。夜、床屋へ行き、神棚へお供え物の飾りつけをする。

▼二月三一日

起床八時、今年もいよいよ今日限りだ。熊さんは集金に出かけた。私は迎年準備に神仏の飾りや、すす払いなど掃除をする。

掛け方四、〇〇〇円余りも未収

年末なので店は差引勘定に来る人達で忙しい。省りみれば、本年三六五日は幸いに家内中で大病した人もなく、揃って新年を迎えることのできるの喜ばしい。経済的には鯨漁が思わしくなく、

(三一五六) 錦堂法親王(五五天) 高野名幸作(元六親) 複製に官製番皇天武神

あり、その上、漁具類の売行きも意外に不振であったため、近年にない不結果であったが、これは如何ともし難いことである。幸いリソゴは上作で、値段も割合高く、六〇〇余円の売り上げがあったのは近年になく好成績だ。四時頃から茶の間に集まり、子供等

をお客さんにしていろいろと馳走を出した。このように、ニコニコした無邪気な顔が揃うのも可愛いもの、めでたく壮健でこの年を送ることのできるのを感謝せねばならぬ。明日は午前三時頃には起きて、禅源寺、神社などへ参るので一〇時休む。

## 父の日記に寄せて

高野名 正 治

『せたかむい』が、平成元年に創刊されて一八年になり、その間、全く欠号もなく継続され、二〇〇号の偉業を讀者として拍手をおくりまします。

ますます充実して、一六ページで発行されているのも町史編さん室の存在と努力と感謝しております。

特に私の父、『高野名幸作日記』は、今回で百十一回も連載され、よく読みこなして、家族も知らない事柄を毎号読み、楽し

みを味わうのは本当に嬉しいことであり、道内や東京など、故里を離れた人々に多く愛読されているというのもうなづけ、嬉しいことです。

元稲倉石鉾山に居られた高橋藤藏さんからの年賀状には、「本陣の浜から、遙か小樽方面を見れば六夜の月が輝き、海に映して実によい景色で、一幅の掛け軸を見るようだ」という日記の部分を褒めいただきました。

また、古平町短歌会の池田テル

(日記は原文のままですが、読みやすいようにと、適当に句読点を入れました)

▼一月一日

心地よ久休んで居った自分は、時計か四時を打つと目がさめた。早速起床、禮服を着し、洗面后、神仏を拜し大正十四年度の家内安全、商売繁盛を祈る。今朝は祝聖会の読経会阿るので、四時二十分出掛けた。静かに風もない、空は雪か静かに降って居る。エビス神社に参拝す。暗夜に大電球の光里も神々しい。后、禅源寺へ参る。会員七分通り参って

さんからは、いつも日記について感動のお便りを下さって、心からお礼と長寿を願っております。

父は書くことが好きで、机に向かつてものを書いていた父の姿を、子供の頃からよく目にしていました。また、神社のお祭り、衛生組合、火防組合その他、行事のときには大きな模造紙に筆字で書いていたものです。

子供が多く、大した財産も残

いる。読経も今日ハ殊更丁寧、今上陛下萬歳を祈り、観音經を上げ終りたハ五時半、后、和尚の室で新年を賀し、茶菓を馳走され、年始とて御酒と肴の馳走を受け、六時半、東がホノノと明るくなる頃辞す。其足で郷社を参拝、后、成田山に参り、司によ里、港町辯天さんに参り八時半帰る。運動して頂くおもちハ殊三おいしい。十時、学校拝賀式三列し、后、交禮会の式阿る。朝岡新町長新挨拶阿る。一一時帰り、支店、困、カ、中、本、②によ里帰る。年賀状を書き、夜、初売の支度し、八時休む。

せなかつた父でしたが、六〇数冊の日記は、浜町の大火災のときも石倉にあったので幸い難を免れ、古平の庶民の歴史として皆さんに読んでいただき、お役に立つことができましたこと、地下の父も喜んでいことでしょう。

海が好きで、子供が好き、幼い頃、雨の降る日以外は、「浜サ行つか」と言つて、近くのカの浜へ行きました。鯨漁で賑わう浜、\*



\* 今よりも太かったローソク岩を眺めた、幼い日々のことを思い出します。

古平の町民は昔から和の精神が強く、人が良く、争いことを好まず、皆助け合ってきた百数十年来の歴史が誇りです。

今、多くの著書を出され活躍しておられる、国際キリスト教大  
学教授の最上敏樹さんは、誇るべき国際政治学者です。また、古平を最も愛された詩人・吉田一徳師など、伝統ある古平町に生

← 高野名幸作さんは演劇が好きで町内の素人演芸会などに出演していました。なかでも女形が得意で、写真は、劇場での慈善演芸会で『阿古屋』に出演したときの舞台姿です

を享けた方が居られます。

「せたかむい」も作家や郷土史家からも注目されており、町当局や町史編さん室に、敬意と今後の発展を祈念いたします。

「せたかむい」に寄稿されておられる方々の、貴重な作品に敬服しお礼を申し上げます。

### ― 追 記 ―

日記の中にひんぱんに出てくる『熊さん』のことについて知りたいというお便りもいただいておりますが、熊さんこそ、私達にとつて生涯忘れ得ぬ恩人・高野熊蔵さん

んです。

熊蔵さんは佐渡から来道し住み込みで働いていました。本当によく働く人でしたが、私達子供は熊さんのひざに坐り、得意の石見重太郎や昔話などをよく聞かせてもらったものです。子供好きな人でした。

奥さんのコノさんが来て浜四の方に別居されましたが、私達がなにか使いにでも行くと、コノさんは必ずお小遣いをくれる方でした。明治の美德をもつお二人に心からの感謝をささげます。

刊行二〇〇号おめでとうござ

います。

古平町を離れて三十六年、編さん室のご好意で毎月『せたかむい』を恵送していただき、古平の良さを再発見しております。

私の住民歴は、昭和三十七年から昭和四十四年までの、わずか七年という短期間で、しかも、僻地と呼ばれていた沢江村番外地にある稲倉石鉾山でしたから、古平町民としての最低の知識もないままに古平町を離れてしま

いました。

その後、鉾山は売山・廃山となり、悲しい運命をたどったのですが、その悲しみとは裏腹に、日が

## 『せたかむい』で

### 古平町を再発見

富山市 高 橋 藤 藏

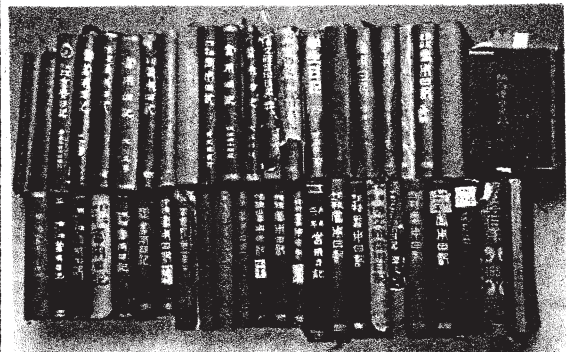
経つにつれて古平町と稲倉石への郷愁がつのり、『せたかむい』を通じて古平町の動静を知り、有志

の健筆にふれることが出来まし

たりわけ高野名さんの日記を興味深く読ませていただいております。

当時の世相・町内の動き・産業・物価などが細かくつづられており、これを提供されました高野名さんと、発掘されました編さん室に喝采をおくります。

二〇〇号の発刊に当たり、ますますの発展を心からお祈り申し上げます。



↑ 高野名日記 (大正2年～昭和37年)



# 古平の民話

## アキアジ地蔵

古平は道内でも早くから開けた町ですが、伝説や民話といったものが意外と少ないようです。

その中で禅源寺の『アキアジ地蔵』と願雄寺の『そば喰い地蔵』など、よく知られているものもあり、民話集などにも載っています。町内でも知らない方が多いようですので、ここで先の二編をご紹介します。

明治の中頃、浜町に市造というなまけ者がおった。

商売はいかけ屋(穴のあいた鉄の鍋や釜を修理する職業)だったが、いつも昼間から酒を飲んで、さっぱり仕事などはしなかった。

今日もまた店先でモツキリ(コップ酒)を飲んでいて、店のばおさんはたまりかねて言った。

「いつつあん(市つあん)や、大分酒代がたまってるケ、いつ払ってもらえるべ」

「あれっ? そうだっけ。おれ借金あるってか?」

「やだよオー、市つあん。忘れとるのか...」

ばあさんが帳面を持って来ると、

「あつ、そうだっけ、そうだっけ。思い出したじゃ、わかった、わかった。今度持つて来るで、そいじゃナア」

と、逃げるようにして店を出て行

つてしまった。

市造はどこへ行つてもこんな調子だった。それで町の人達はだっけの市つあんとバカにして、誰も相手にしなくなつてしまった。

ところでこの町に、とてもご利益のあるお地蔵さんがあった。目の悪くなつたばあさんが、「もう一ぺん、メンコイ孫の顔を見せてください」

と頼んだところ、かすんで見えていた孫の顔がはつきり見えるようになる。

若い衆が、

「メンコイ嫁つご当たるように」

← あきあじ地蔵(禅源寺)



← アキアジ地蔵をまつつてい  
る禅源寺地蔵堂



と拜むと、まわりがうらやむような嫁さんが来る。

漁師たちが、「どうか大漁させてもらええ」

と拜むと、どの船も大漁旗を立てて帰つて来る。それでこのお地蔵さんに

は、いつも花やだんごがお供えしてあった。

ある日のこと。かぎのついた長い竿を持った市造が、川でアキアジをとろうと、このお地藏さんの前を通りかかった。市造も食わなければ生きていけない。その頃は、川へ行けば簡単にアキアジがとれた。川へ上つて来るのを待ちかまえてかぎで引つ掛けるのだが、三、四匹ならわけなくとれるから、その日の食い分にはなつた。

さてお地藏さんの前まで来ると、少し神妙な顔になり、ペコツと頭を下げた。

「お地藏さまア、頼むで。おらあにもアキアジとらせてくれや」だが、そこは抜け目のないだつて、市造のこと、お地藏さんにお供えしてあるお菓子をお口にほうりこむと、

「ごつあん、ごつあん、じゃあちよつくら行つて来るで——」

ぐるつとお地藏さんに背を向けると、鼻歌まじりで去つて行つた。

日暮れどき、市造はチヨヘタン川の土手を、ふらりふらりと手ぶらで戻つてきた。大方、また、

どつかの店ででもモツキリをやつて来たのか、酒の臭いをぶんぶんさせている。

お地藏さんの前まで来ると、市造の足が止まつた。さつき残しておいたお菓子がきれいに無くなつている。誰かが持つて行つたのか、犬でも食べたのか。

「やいやい、くそたれ地藏の、うすのろ地藏、てめえがぼんやりしてるからみんな無くなつてるでねえか。さつきおれがあんなに頼んだのに、見ろ！ アキアジは一匹も取れなかつたぞ！」

市造はかぎのついた竿で、お地藏さんの頭をポンとたたいたが、かぎの先がすべつて、お地藏さんの右の目に当たつた。

その夜のことである。市造の右の目が激しく痛みだし、熱を出して苦しんだ。四、五日たつと、何にも見えなくなつてしまった。

「だつげの市つあんの、片目がつぶれたとよオ」

「お地藏さんの目を、かぎで引つかいたそうな」

うわさはたちまち町中に広がり、その頃から、浜であんなにと

れていたアキアジが、ぱつたりとれなくなつてしまった。漁場の親方や漁師の人達は、浜をおろおろしながら相談した。

「あのだつげの市めが、お地藏さんに悪さをしたからだ」

「あのなまけ者が、なんてエ」としてくれたんだ！」

「こはひとつ、お地藏さんにみんなでお詫言せねば」

「お坊さんをお呼びで、供養してもらふ」

その供養の日、引つ張り出された市造は、みんなの前で手を合

## そば喰い地藏

今日も的場のじいさんは、そば粉をこねつていました。ここでそば屋を開いてからは、

「このそばはうまい」と、通る人が皆立ち寄つて食べるからです。

それが、いつの間にか評判になり、店は大変繁盛するようになりました。じいさんは、皆に喜ん

せていた。目には白いほうたいを当てていた。

供養のおかげで、お地藏さんも機嫌をなおして下さつたのか、浜にはまた大漁旗が見られるようになった。

それから誰言うともなく、このお地藏さんを「アキアジ地藏」と呼ぶようになったという。

だつげの市つあんは、風のようにいなくなつてしまった。町を出て行く姿を見た人はだれもいなかったという。

◇ ◇ ◇

でもらえてこんなうれしいことはないと言つて、顔をほころばせるのでした。

ある日のこと、寄つてそばを食べる客も少ないので、店を早く閉めて、炉辺でわらじを編んでいました。時々ここを通る人に、わらじが無いかと聞かれるので、作つておこうと思つたからです。

その頃、川向こうの沢江村に地

蔵堂があつて、この地藏さんに土地の人々から深く信仰されていて、供物も絶えることがありませんでした。

やがて朝になり、的場のじいさんが、夜なべに作ったわらじを外に吊ろうと入口の戸を開けたところ、そこに沢江村の大きな地藏さんが立つていたのです。

じいさんはびつくりして家に入ると、おばあさんに、

「これはいったいどうしたことじゃ、地藏さんが家の前に立っている。ちよつと外に出て見ろ」と言いました。

「そば喰い地藏 (写真中央)



←そば喰い地藏をまつついで願雄寺薬師堂



どうしてあの川を渡つて来たんだらうと、不思議でなりませんでした。

じいさんとおばあさんは、

「そうだ、きつとあの的場のそばがうまいと聞いて、夜、そつと川を渡つて来たに違いない。これは本当にありがたいことだ。これはこのままにして置けない。」

と言つて、地藏さんを川向この沢江村のもとの地藏堂に戻し、手打ちのそばを供えました。

「地藏さんがそばを食べに来た」という話がパツと町中に広まると、

的場のじいさんのそば屋にも客が増え、川を渡つて行つたという地藏さんは、「そば喰い地藏」と呼ばれるようになり、ますます人々の信仰を集め、人気が高まりました。

その後、南信州伊那の一村に生まれた石上皆応が、渡道して函館の寺院で修行していましたが、やがて古平での布教を始め、明治一五年、浜町に願雄寺を建立しました。この時、本堂脇に地藏堂を建て、ここに沢江村にあつた地藏さんに移してまつりました。

おばあさんがそつとのぞいて見ると、じいさんの言うとおりの地藏さんがちゃんど立っているのです。

ここを通る人は、皆あの渡し舟に乗つて来るのに、地藏さんは

を供えて供養をし、終ると参詣人一同にそばが振舞われるのが恒例となりました。

## 沢江村

### 狐の鳴き止みの話

#### の話

沢江村には、子供の頃よく親からも聞かせられたが、昔から次ぎのような口伝(くでん)がある。

沢江の裏山の上(かみ)で狐が鳴くと川水が出て洪水になる。中ほどのところで鳴くと火事があり、下(しも)の方で鳴くと時化がくるというので、皆が恐れ避難準備をしたものだという。狐の嫁入りと言われる狐火は、大正の中頃まで沢江村の裏山で見ることがあつたと古老から聞いた。

(沢江村 福士嘉代吉 吉能仁太郎さんの談話として、記録がある)

毎年七月二十三日には、そば

春のあらし 前浜での悲劇

## 第二出羽丸遭難

### 海に生きる者の美談として残る

明治四五年(一九一三)三月、前浜で起きた第二出羽丸遭難の逸話は、その後、長く語り継がれてきました。が次第に町民の記憶から薄れつつあるようです。

この遭難事故は、鯨漁の始まる直前の春三月一九日夜半のことでした。

樺太へ向けて本州からの漁夫や、炊事などに当たる婦女子らに乗せ、外に漁具や漁業用品を積み込んで山形県豊浦港を出港した第二出羽丸(四〇〇ト)が、荒天を避けて古平湾内に停泊していたところ、北東からの烈風を受けていかり綱が切れ、恵比須神社(現在の厳島神社)下の前浜の岩礁に打ち寄せられたのです。

船内には利尻方面の鯨漁場に向かう本州からの漁夫や、炊事などに当たる婦女子、乗組員等一八〇名余りが乗っていました。すぐ目の前の前浜での遭難に、警

察や消防団のほか町民が一丸となつて救助に当たりました。

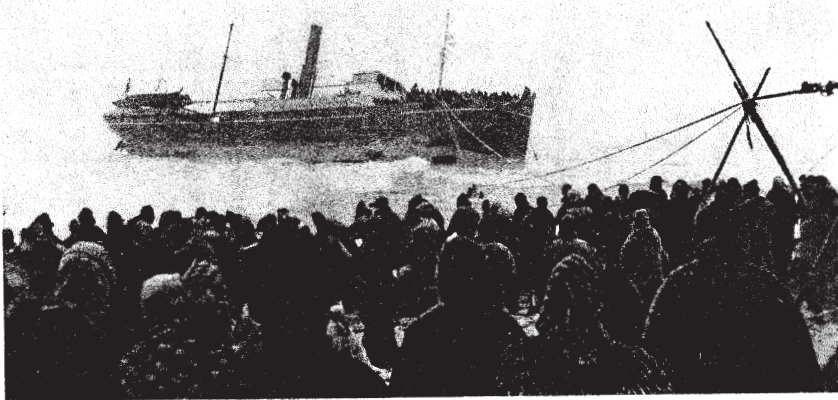
船から縄を結んだ樽が流されましたが、強風と波浪のため岸に届きません。これを見た一人の若者が海に飛び込んで樽を拾い上げ、縄に救助用のロープを結んで、それを野村猪三郎裏の丘にあったシコロの太木に張ることに成功しました。

このロープに竹籠を吊るし、船内の人々を乗せて次々と岸に引き寄せて救助しました。不幸にも海中に転落したりして三名の犠牲者がいましたが、その勇敢な救助活動と、町民の手厚い介護によって多くの生命を救うことができました。

このことは人命にかかわる、海に生きる人達の美談として、当時広く伝えられました。やがて時が移り——たまたまこの船に乗っていて無事に救助さ

れた一婦人が、そのときの感謝の気持ちをお忘れられないと常に家族に語っていたことから、母親の遺志として、函館市に住む佐藤亀治さんが港町町内会を通して

← 船と陸にロープを張り、息をのみながら緊迫した救助作業を見守る大勢の町民



度々厳島神社に寄付をされておりました。ところが、昭和五九年一二月(一九八四)一通の手紙が送られて来ました。

その内容は、「その母も今は亡くなり、自分も役所(函館港湾事務所)を退職するので、この際せめてもの恩返しをしたい」

海難当時、母親のツルさんは二十歳でしたが、荒波の中九死に一生を得て、懸命の介護を受けたことを家族に語り、感謝の気持ちを終生忘れなかつたそうです。

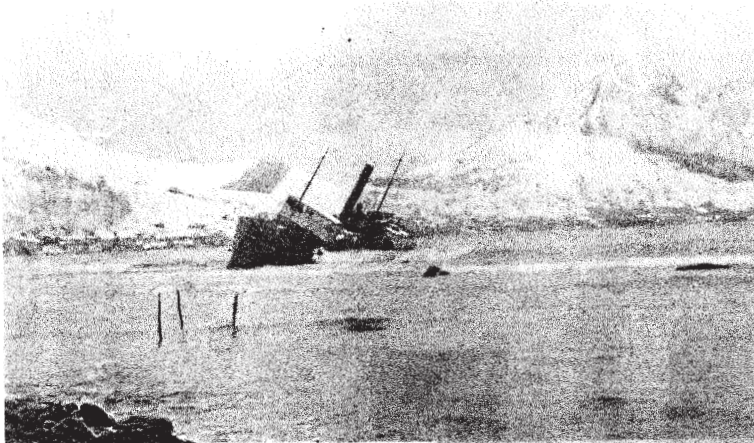
その必死の救助活動に対する感謝の気持ちと、危険を顧みず救助に当たった人道愛を後世に残すため、記念碑を建立したいとの依頼でした。

そこで港町町内会では協議の結果、神社委員長をしていた横川さんを中心とした計画を進めることになりました。建てる場所は遭難場所に近い、海を見渡せる厳島神社境内とし、記念碑の形なども協議して決めました。

記念碑は遭難者救出の主役となつたシコロの木にちなんで、「シコロの碑」と命名され、題字は小樽海上保安本部の伊美克巳

部長の筆です。除幕式は昭和六〇年(一九八五)九月一六日、厳島神社例祭の前日に畑澤町長や港町町内会、その他多数が出席して行なわれました。

その席上で佐藤亀治さんは「今は亡き母親の供養と、七三年前復旧した船体、その後の消息は不明(新しく見つけた写真)←座礁して傾いている出羽丸



必死に救助にあたっていた古平町民に感謝します」とあいさつをされました。

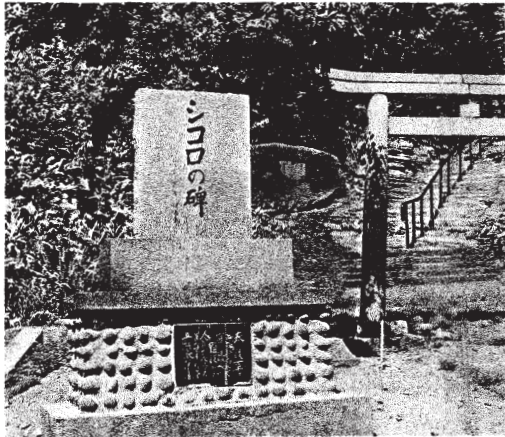
ところで、シコロの木はその後どうなったのでしょうか。現在沢江町に住む山條カズさんは、幼少の思い出を次ぎのように語っています。

「子どものころ、そのシコロの木の辺りで遊んだことがあります。その木は倒れてしまつて、根は

腐ったまま残っていました。ふた抱えもある大きな木でした。また、磯の掘割りには死体が上つたそうですが、そこでは泳ぐなど父にいわれた記憶がありません」

実は遭難事故の後、シコロの大木の木肌を削り『人命救助の木』と書き入れたところ、そこから腐れが入つて倒れてしまつたのです。しばらくそのままでしたが昭和五〇年頃になつて、由緒ある木をそのまま腐らせてしまうには忍びないと、残った根を掘り起して、厳島神社の中に保存して置いたそうですが、傷みがひどくなつて

← 厳島神社境内のシコロの碑



← 地域活性化センターから発行された「伝えたいふるさとの100話」この本はさらに韓国語に翻訳されて出版されました

### 伝えたいふるさとの100話



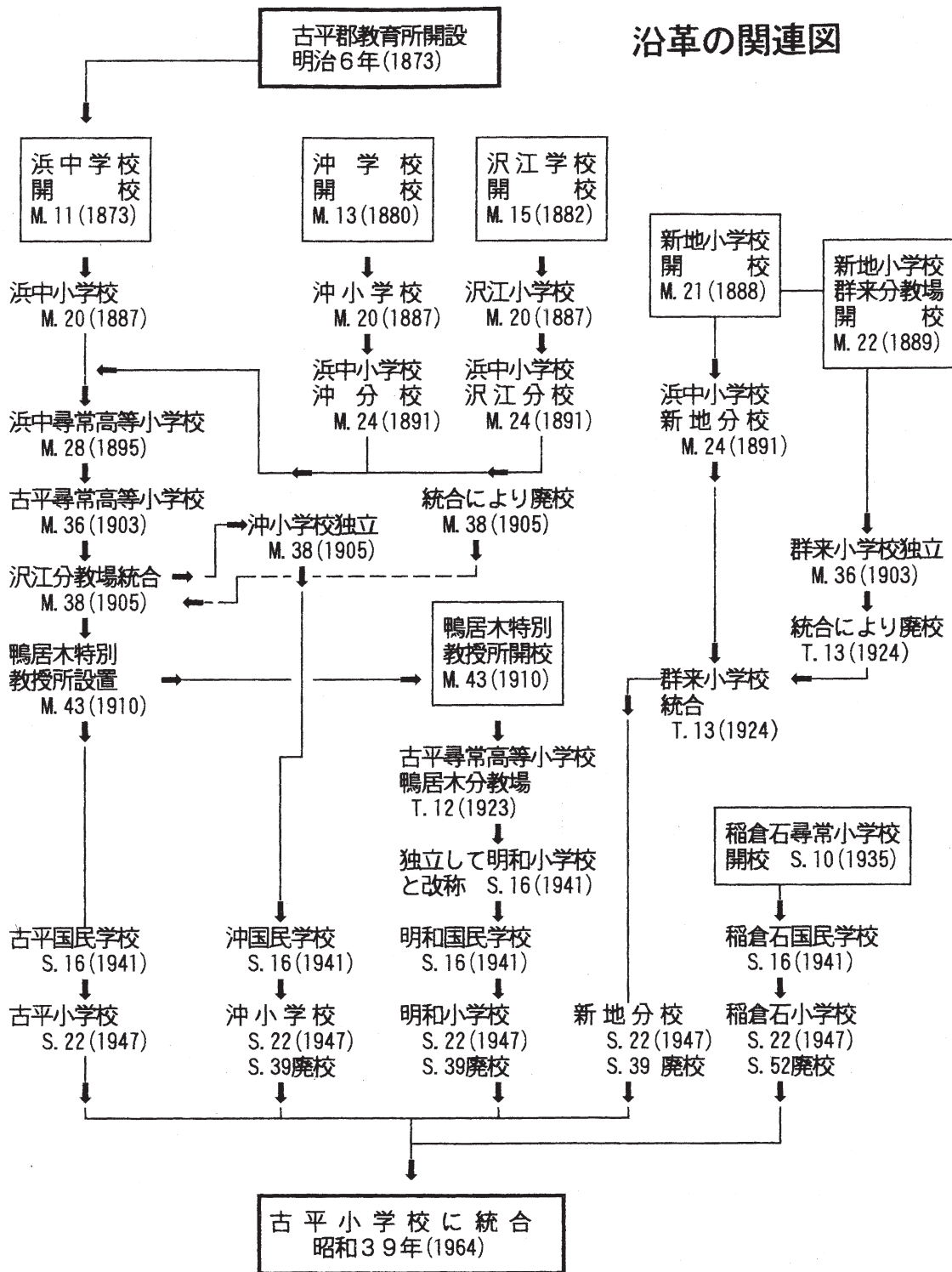
処分されてしまい、残念ながら今は何も残っていません。

その後、「二代目シコロの木を植えては……」という話が持ち上がり、平成五年に記念碑のうしろに植えられたのが現在のシコロの木です。

※ 第二出羽丸遭難は明治四五年の出来事ですが、そのときの写真二枚がよく残っていたと思つていたところ、昨春秋、偶然にもさらにもう一枚の写真が見つかりました。陸の孤島—この田舎に当時、文化の先端をいく写真屋が三軒もありました。これもニシン漁のおかげです。今回は、その写真を紹介したいという意味もありました。

# 町内の小学校を訪ねる

## 沿革の関連図



### ◆古平小学校

古平郡教育所の開設を古平小学校の創立としていて、数度にわたつて校名を改称した。古平町内の中心校として、地域に果たした役割はきわめて大きいものがある。浜中学校として建設された校舎は、当時のモデル校舎と言われたモダンな建築であったが、惜しくも出火により焼失した。

### ◆新地小学校

新地方面の急激な人口増で校舎を新築して開校、現在の吉田商店と藤沢商店の間の小路を上がつた左側にあり、その先には移設前の禅源寺の墓地があった。

隣家からの出火で校舎は全焼し、現在の古平温泉駐車場の位置に新築移転し、同時に群来小学校を統合した。

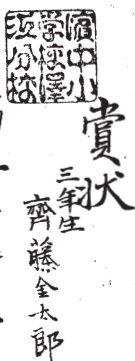
### ◆澤江小学校

澤江・歌葉村に次第に鯨漁業者が定住するようになり、児童は渡し舟で古平小学校に通学していたが、不自由であり危険がともなうこともあった。

明治一五年、中通り奥にあった

地藏堂の隣に、民家を借りて澤江学校を創立し、古平尋常高等小学校の増築を機に、本校に統合し廃校となった。

← 町内の小学校では明治一七年からこのような賞状が与えられていた



品行端正 學術優等  
三井三孝 授與ス  
三年生 齊藤金太郎

明治二十七年三月廿六日

澤江中學校

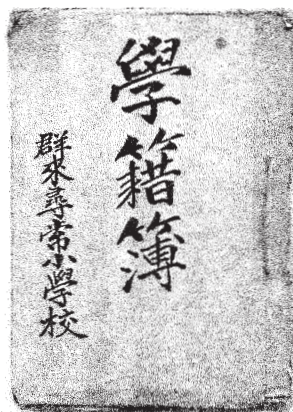
澤江分校

### ◆群来小学校

群来村は、戸数六、七〇戸の部落であったが早くから開け、鯨の好漁場として賑わった。有力な漁業者に支えられ、新地小学校の開校にともない、恵比須神社下に分校として開校した。当時の校舎の土台石が残っているが、傾斜地で敷地も狭く、校舎前での

記念撮影の写真があるが、民家程度の建物であったと思われる。

← 群来尋常小学校時代の学籍簿



### ◆明和小学校

開拓が進み、就学児童も多くなったが、古平小学校への通学も困難があり、部落から町へ対して学校建設の陳情が出された。

町では廃校になった澤江分校の校舎を移築することにし、ほとんどは部落民の労力奉仕と寄付によつて建設し、明治四三年九月、古平尋常高等小学校鴨居木特別教授所として開校した。

### ◆沖小学校

沖村は当時戸数は一〇〇戸を超え、ローソク岩からセタカムイにかけては鯨の千石場所といわれ、その恩恵を受けて地域は大い

に繁栄した。税収でもその割合は町内のトップを占めていた。

沖村川傍の民家を借りて開校、後に山側の傾斜地に新築したが、再び川岸に新築移転、現在その一部が公民館になっている。

← 山側に新築された校舎の校門、草に埋もれて現存している



### ◆稲倉石小学校

鉱山従業員が増加し、就学児童も共に生活をするようになり、学校の設置が必要となつてきた。そこで町と鉱業所が協議し、鉱業所が設備や経費を負担することにし、町が特別教育規定による稲倉石尋常小学校の設置を申請し認可を受けた。

鉱山の縮小により、古平小学校に統合され廃校となった。

(次号 ① 古平小学校)